（７）大野城跡（追加指定候補）

１）立地

安宅氏居館跡の日置川を挟んだ対岸に位置する。南北に伸びる丘陵の先端部に位置し、最高所は標高 28mである。城跡南東の麓部には春日神社が鎮座する。

写真 4-26 大野城跡　遠景

２）縄張りの特徴

現在の規模は南北約 65m東西約 35mを測るが、北側は後世に大規模な削平を受けているため、当初の規模は不明である。伝承では削平を受けた北側にも曲輪と思われる平坦地があったと伝わる。城の構造としては、2 つの曲輪を中心として堀切が築かれている。最高所にあたる曲輪Ⅰは、南北約 27m、東西約 15mと南北方向の長い楕円形状を呈する。やや造成が甘くなっているのか、北東側に向かって高まっている。南端部に土塁状の高まりが確認できる。北の鞍部付近には後世の攪乱があり、城に付随する遺構か否かの判断が非常に難しい。

曲輪Ⅰの南側には、堀切を挟んで、東西に 2 つに分かれる小曲輪が組み合わさって上下二段で構成される曲輪Ⅱがある。下段にあたる西側曲輪には、東側曲輪からの土塁が続いている。規模は上下二段を合わせて南北約 13m東西約 15mを測る。また曲輪Ⅱのさらに南側には、尾根を遮断する堀切があり、城の範囲の南限とみられる。曲輪Ⅰの北側には東西に延びる帯曲輪があり、現状ではそれが城の範囲の北限と考えられる。

発掘調査は実施されておらず、測量調査時にも遺物の表採がなされていないことから、時期の確定は慎重にならざるを得ない。大野城跡は、後世の削平や攪乱によって全体像を把握することは困難であるが、安宅氏居館跡の対岸に位置し、河川交通を監視する役割を担っていたものと想定されている。また麓の春日神社との関連から、八幡山城跡と八幡神社、中山城跡と春日神社（田野井）のような城と神社のセット関係をうかがい知ることができる。

３）調査成果

調査年度	調査主体	調査方法	調査成果の概要
平成 15 年 （2003）	日置川町 教育委員会 （安宅荘中世城郭発掘調査委員会）	測量調査	・ 城跡範囲の把握。

写真 4-27 堀切 2

写真 4-28 春日神社

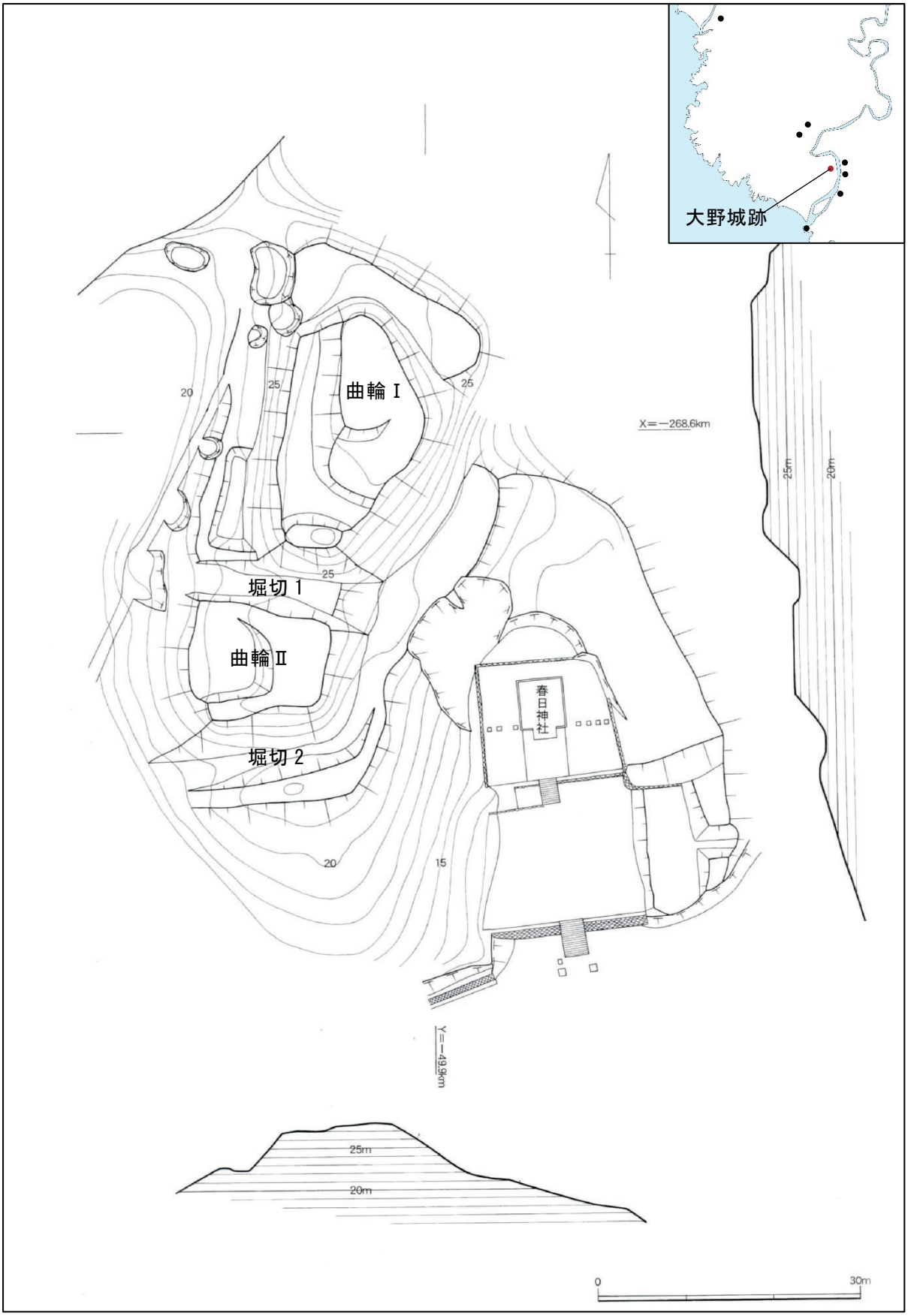

図 4-15 大野城跡　測量図

（８）大向出城跡（追加指定候補）

１）立地

日置川河口部や海上を見張るための城で、日置川河口左岸の標高約 80mに位置する。

写真 4-29 大向出城跡　遠景

２）縄張りの特徴

2 本の堀切が残っているが、曲輪だと考えられる小ピーク部分は造成が甘く、きちんとした平坦面にはなっていない。詳細測量調査を行ったが、やはり明確な平坦面は確認できていない。ただし、県内の同様の見張り場と考えられる遺跡では、堀切や竪堀などの防御施設をもっている例は見当たらないことから、ある程度の特異性が認められる。

写真 4-30 堀切 1

判断は難しいが、小ピーク部分を含めた城跡の規模は、東西約 50m、南北約 40m 程度の小規模なものとなっている。堀切 1 は全長約 44m、堀切 2 は約 46mを測る。土塁には石積みがなされている。勝山城跡と共通する技法である。海上を見張るだけであれば堀切は必要ないと思われ、軍事的緊張があったことを物語る城跡である。測量調査に伴う草刈によって、堀切の掘られている東側に石積みが確認できたが、近世に遠見番所が築かれた跡ではないかと思われる。

３）調査成果

調査年度	調査主体	調査方法	調査成果の概要
平成 19 年 （2007）	白浜町 教育委員会	測量調査	・ 城跡範囲の把握。

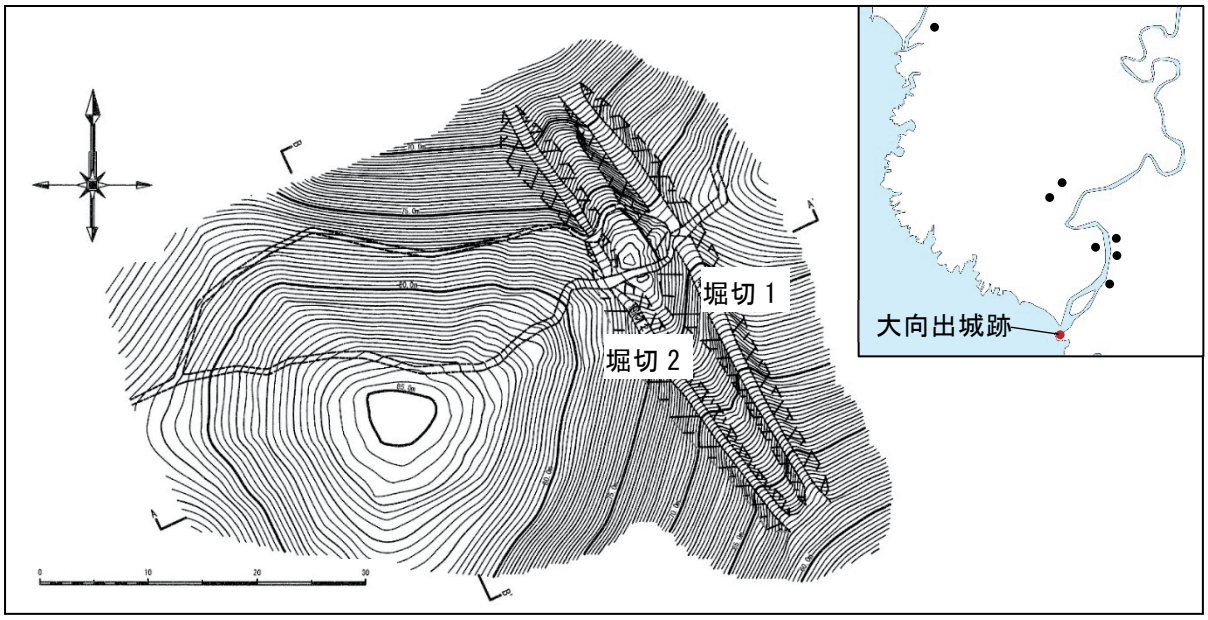

図 4-16 大向出城跡　測量図

第４節　安宅氏城館跡の特徴

本章の第１節では、安宅氏が歴史上に登場する以前の紀伊国の政治状況や、畠山氏や将軍家の内訌といった畿内の政治情勢と密接に関連している様子を述べた。また安宅荘の立地は、安宅川（日置川）が流れるため舟運が良く、河口部の日置浦は紀伊山地からもたらされる物資の集積地であり、かつ熊野灘や枯木灘を行き交う大船が数多く集まる水上交通の結節点として栄えたとされている。さらに、安宅荘の北側にある三箇荘との境界に沿って熊野参詣道が通過するなど、陸路の便にも恵まれている。このように安宅荘は、水陸双方の交通路との密接な関係を示していることを述べた。

第２節では、熊野に存在する複数の水軍領主の中でも、安宅荘と周辺領主との関係について述べた。そこでは複雑な政治状況に呼応するように、それぞれの周辺領主と協同や敵対を繰り返していたことを示した。安宅氏は、久木小山氏や周参見氏、温井氏と良好な関係を保っており、秀吉による大坂城等の普請に久木小山氏とともに関与したことが知られている。『久木小山家文書』には、安宅氏と久木小山氏の友好関係を示す史料が複数認められる。

第３節では、安宅氏城館跡の各城跡について、発掘調査で解明したことも含め、その特徴を述べてきた。城跡の防御施設（堀切、竪堀等）を模式的に示すと図 4-17 のようになる。この図で特に注目すべきは、安宅荘に北接する富田荘と安宅荘中心部とを結ぶ陸路の両端に土井城と要害山城が配されているのに対し、安宅氏と友好関係にあった久木小山氏との境界である北西側にはこうした城は認められないことである。さらに、富田荘に面する要害山城跡の西側から北側斜面には、複数の防御施設が認められるなど西側と北側とを強く意識して防御施設を配していることがうかがわれる。このことは安宅氏が北西側からの侵攻を警戒していたことを示すと同時に、戦国期の紀伊半島の政治情勢の一端を示していると考えられる。

このように安宅氏城館跡は、豊富な史料により熊野水軍の活動を知ることができるとともに、良好な状態で保存されている城館群は、水陸双方の交通路との密接な関係を示すだけでなく、そこから戦国期における紀伊国の政治状況をうかがい知ることができ、鎌倉時代から戦国時代の水軍領主の活動や領域支配の実態を知ることができる貴重な城館群である。

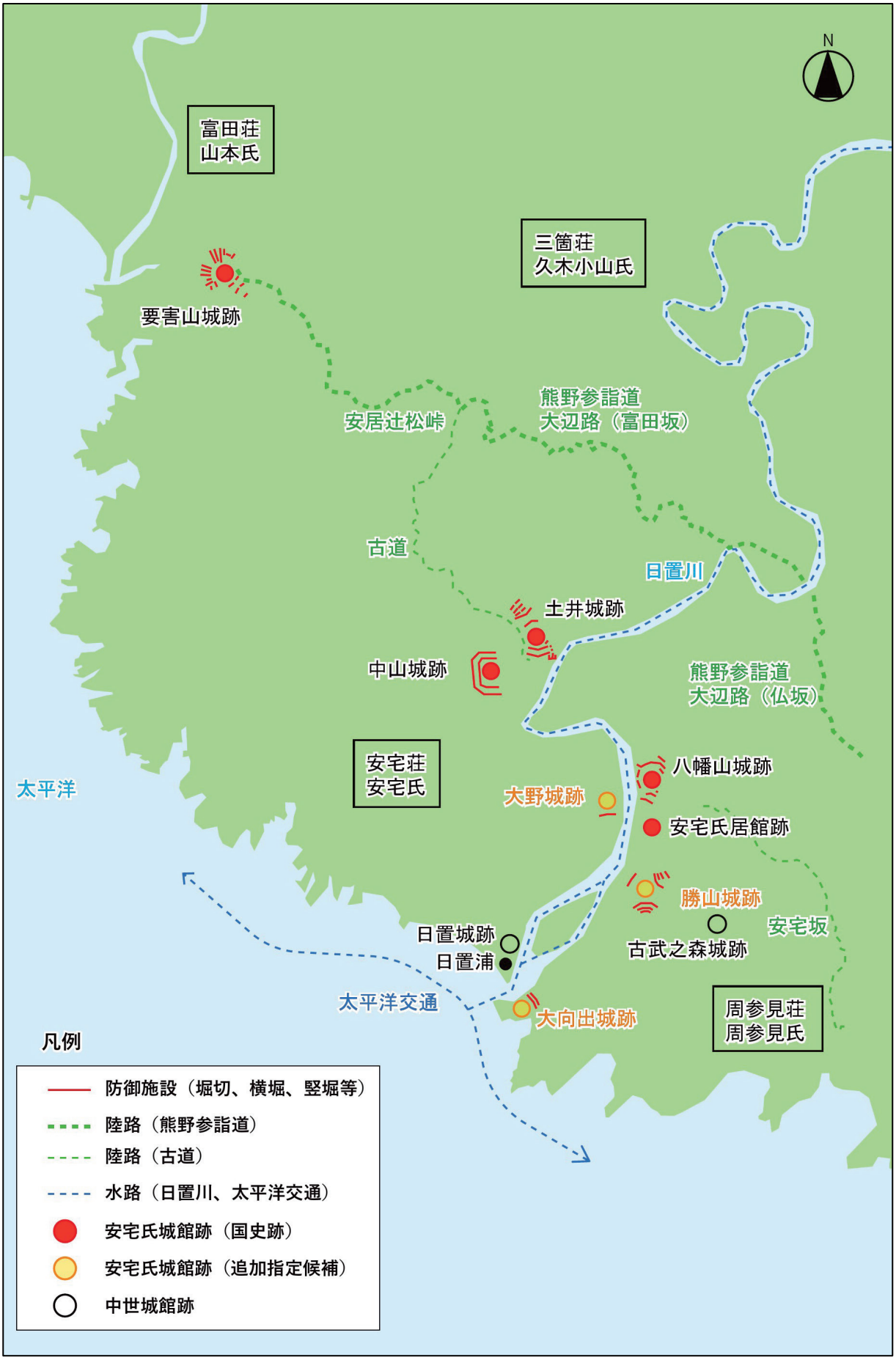

図 4-17 安宅氏城館跡の特徴